

学位論文 要旨

説明的文章の読みの学力形成論

1. 研究の目的と方法
2. 論文の構成
3. 各章の概要

間 瀬 茂 夫

1. 研究の目的と方法

(研究の目的)

1980年代、目標論を中心に議論されてきた学力研究は、学習論への転換を迫られた。知識や能力のあり方をとらえ直す時代状況にあつて、学力とは何かという問いをめぐって戦後繰り返しなされた学力論争の不毛性が指摘された。めざすべき学力が学習者においてどのような知識構造として成立し、どのような過程において学習されるのかを明らかにすることの必要性が指摘されたのである。学力の学習論はその後の学力論議において基底をなすものとなっている。このような学力論の研究課題の把握から、本研究は、説明的文章の読むことという学習領域において、どのような学習過程において国語学力が形成されるのかという国語学力形成論に取り組むものである。

戦後の説明的文章の読みの学習指導研究が中心的に取り組んできたのは、「文章の論理の理解」という目標である。しかし、その目標に対する考え方は一通りであったわけではなく、「文章の論理」に対する考え方の拡張が説明的文章の読みの学習指導論を発展させてきたとも言える。では、そうした「文章の論理の理解」に関する説明的文章の読みの学力は、どのように形成されるのか。この問いが本研究の研究課題の核となる。

この問いを解決するために、本研究では、学力形成の中心的な場である授業を構成する4つの軸、すなわち教材である説明的文章（第I軸）、読み手としての学習者（第II軸）、読みの授業を設計し実践する教師（第III軸）、授業における学習者同士の協同的過程（第IV軸）を設定する。4つの軸に関わつて、本研究で取り組む研究課題は、次のようなものである。

- 1) 説明的文章の読みの学力形成論の取り組むべき課題とはどのようなものか（第1章）。
- 2) 説明的文章を理解する過程に照らした場合、説明的文章を読む力、とりわけ「文章の論理を理解する力」はどのようにとらえられるか（第2章）。
- 3) 第I軸の説明的文章教材は、どのような構造としてとらえられるか（第3章）。
- 4) 第II軸の学習者は、現実的な読み手として説明的文章教材をどのように理解するのか。説明的文章の理解行為の全体的な把握、学年による読みの行為や過程の発達の違いを明らかにする（第4章）。
- 5) 第IIIの軸である教師は、説明的文章の読みの学力をどのようなものとしてとらえているか。教師が文章の論理をどのようにとらえているか（第5章）。
- 6) 第IVの軸である学習者同士の協同的過程を通して、学習者はどのように説明的文章の読みの学力を形成するのか（第6章）。
- 7) 研究成果の総括と説明的文章の読みの学力形成および国語学力形成論の展開のための提言を行う（結章）。

(研究の方法)

まず、第1章で、説明的文章の読みの学力形成に関する研究課題について、戦後の学力論と、認知心理学における文章理解研究の成果、説明的文章の読みの学習指導論の展開をふまえてとらえ直す。なお、ここでは、「文章の論理の理解」について、文章側に構成された論理を受容するだけでなく、読み手が推論によって積極的に補うことによって成立するという仮説を立てる。そして、こうした推論の関わる読みの学力を「推論的読み」と定義し、推論的

読みがどのように形成されるかということを中心に以下の研究を進める。

次に、第2章において、先行研究によって提示されている文章理解モデルを検討することで、認知過程に焦点を当てた学力モデルを構想する。これまでの国語学力モデルは、知識・技能・態度など目標の分類を主眼とする目標論的学力モデルが多く提示されてきたが、本研究では、目標として示される国語学力がどのような知識や能力、認知的過程によって成り立つのかを分析し、説明することに主眼を置いたものとする。そのような意味で、形成論的国語学力モデルである。

第3章から第5章では、第I軸から第III軸、すなわち、現実の説明的文章教材の理解のあり方(第3章)、学習者の読みの行為(第4章)、教師が持つ説明的文章の読みの学力観(第5章)について、実態的な調査を行い、学力モデルに沿って分析する。また、明らかになった特徴や傾向について、学力モデルへの還元を行い、モデルを詳細化し拡張する。

第6章では、還元・拡張を行った学力モデルに基づいて、推論的読みを形成するための授業仮説を立てたうえで、説明的文章の読みの授業を実施し、観察・記録する。そして、第IV軸である学習者同士の協同的過程について分析・考察し、どのように推論的読みが形成されるかを明らかにする。そのことから、なぜ協同的過程によって推論的読みが形成されるかについて論じる。

結章では、各軸の現実的な側面を還元・拡張した形成論的学力モデルに基づいて、説明的文章の推論的読みを形成するための提言を行う。

2. 論文の構成

序章 研究の目的と方法	1
第1章 説明的文章の読みの学力形成論の課題	5
第1節 学力形成論の課題	5
第2節 説明的文章の読みの学習指導研究の課題	16
第3節 説明的文章の読みの学力形成論の枠組み	33
第2章 推論的読みを軸とした説明的文章の読みの学力モデルの構想	39
第1節 説明的文章の読みの目的と推論・論証	39
第2節 説明的文章の理解モデルの検討	43
第3節 説明的文章における知識と論証の階層的枠組み	54
第4節 推論的読みを軸とした説明的文章の読みの学力モデルの構想	65
第3章 推論的読みを観点とした中学校説明的文章教材の文章構造の分析	79
第1節 中学校説明的文章教材の文章構造の分析の観点	79
第2節 中学校説明的文章教材の文章構造の分析	80
第3節 中学校説明的文章教材の文章構造と読み手の推論の相互作用の分析	98
第4節 中学校国語教科書における説明的文章教材の系統性の分析	127
第4章 中学校段階における説明的文章の推論的読みの発達と学習可能性	143
第1節 学習者に対する説明的文章の読みの調査の枠組み	143
第2節 中学校段階における説明的文章の読みの行為の発達	

—読みの調査 1 と調査 2 を通して—	145
第 3 節 中学校段階における説明的文章の推論的読みの発達	
—読みの調査 3 と調査 4 を通して—	167
第 4 節 中学校段階における説明的文章の論理的関係に関する理解方略の学習可能性	
—読みの調査 5 を通して—	182
第 5 章 教師の持つ説明的文章の読みの学力観と指導理論の検討	193
第 1 節 教師の持つ説明的文章の読みの学力観と授業のあり方をとらえる枠組み	
—授業記録の分析をもとに—	193
第 2 節 中学校段階における国語科教師の持つ説明的文章の読みの学力観と指導理論 の分析—教師への調査 1 と調査 2 を通して—	200
第 3 節 米国における説明的文章の読みの指導観の検討	224
第 6 章 中学校段階における協同的過程による説明的文章の推論的読みの形成	251
第 1 節 学力モデルの拡張による授業仮説の設定	251
第 2 節 小グループの話し合いによる説明的文章の推論的読みの形成過程の分析	
—授業観察 1 と授業観察 2 を通して—	267
第 3 節 協同的過程を通じた説明的文章の推論的読みの形成	280
結 章 説明的文章の読みの学力形成論の展開	285
第 1 節 前章までの研究成果の総括	285
第 2 節 説明的文章の読みの学力形成論の展開	290
参考文献	293

3. 各章の概要

(第 1 章)

第 1 章では、第 1 の研究課題に取り組んだ。学力論争史、説明的文章の読みの学習指導に関する研究、認知心理学における文章理解研究といった先行研究の検討を通して、説明的文章の読みの学力形成論の研究課題を再設定した。認識論的な説明的文章の理解を基盤としながら、認知心理学等の研究成果を取り入れ、学習者の認知過程や学習過程、発達に沿って、より高次の読みの学力を把握し、それが他者との関係や協同的な学習の過程の中でどのように形成されるかを実証的に明らかにすることを研究課題ととらえた。

(第 2 章)

第 2 章では、第 2 の研究課題を明らかにするため、先行研究による二つの文章理解モデルを取り上げ検討するとともに、説明的文章における「論理」およびその理解のあり方について、知識哲学、科学哲学、修辞学などを手がかりにして検討することで、形成論的な読みの学力モデルを構築した。

第 1 節では、説明的文章を読むことと「文章の論理の理解」との関係について、検討した。説明的文章の文章構造には、筆者の推論による知識の正当化の過程および結果が論理として反映するため、読み手が文章から知識を妥当なものとして受け取るためには、文章構造に反映した論理に沿って文章を理解することが必要となる。そうした文章理解過程をモ

デルとして表した読解モデルが、読みの学力の内的な構造を明らかにする形成論的な学力モデルを構築するための基本的枠組みになると位置づけた。

第2節では、文章理解モデルを検討することで、説明的文章の読みの学力の構造をとらえるための枠組みを設定した。ヴァン・ダイクとキンチュによるテキストベースと状況モデルという二種類の表象からなる文章理解モデル、マイヤーによる説明的文章の理解するための構造的方略による文章理解モデルを検討し、文章理解過程において読み手の行う推論を特徴づけた。

第3節では、知識の正当性をもたらす推論や論証について、汎用的な論証、科学的知識の正当化を行う科学的説明、常識を用いた説得や価値について論証を行うレトリックによる論証の3つの観点から検討し、そのことを通して、説明的文章の理解過程において形成される状況モデルを知識空間としてとらえ直した。そうした知識と推論および論証の種類の関係の検討から、説明的文章の理解においては、生活世界、学問的世界、統合的世界という知識空間の階層性が存在することを想定した。

第4節では、「推論的読み」の規定を行うとともに、社会的構成主義的な知識観から集団過程において、読みの学習が行われることの意義を論じた。その上で、国語科授業における説明的文章の推論的読みを分析するための形成論的な学力モデルを構想した。

(第3章)

第3章では、第I軸および第3の研究課題に対応し、中学校説明的文章教材について、修辞・論証の理解に焦点を当てた分析を行うことで、現実的な説明的文章教材を類型化するとともに、系統性・段階性を明らかにした。

第1節でこうした観点を設定した後、第2節で、二つの教材について、修辞・論証モデルの分析を行った。一つは、マイヤーが提示した論理的・修辞的關係を分析する方法を用いて論理的・修辞的な整合性の分析を、もう一つは、トゥールミンの論証モデルを用いた論証構造の分析を行った。科学的説明とレトリックによる論証がどのように結合するかが明らかとなった。

第3節では、読み手の推論に注目した教材分析を行った。一つには、説明の対象の状況の推論、二つ目に、筆者の問題解決的な推論・論証における暗黙の前提の推論、三つ目に読み手が、説明的文章を読む過程において自ら設定した問題を解決する際の推論について、それぞれ文章構造との関連において分析を行った。

第4節では、文章のテーマや内容と論証の方法に注目して、中学校の国語教科書における説明的文章教材について、3年間の段階性や系統性を分析した。中1の説明的文章教材教材では、帰納法や仮説演繹法といった発見的な推論の方法が文章における論証方法として用いられていた。中2教材では、演繹的な方法で自然の法則を説明しながら、例外に注目することで社会的な主張を行っていた。中3教材では、歴史的な変化の説明から主張を導いていた。また、中2教材の領域的知識の広がりともとまりについて、考察を行うと、知そのものを扱う教材、学問知を扱うもの、学問知から実践知へ展開するもの、制作知を扱うものといった種類が見られた。

(第4章)

第4章では、第II軸および第4の研究課題に対応し、学習者の説明的文章の理解過程の実態と、発達段階による理解のあり方の違い、修辞・論証モデル形成のための理解方略の学習可能性について、小学校高学年および中学生に対する調査を通して探究した。

第1節で学習者を対象に行う読みの調査の観点を設定した後、第2節では、中学校2年生を対象として、文章理解過程における読みの目的や教材の文章構造と、読みの行為の種類との関係を明らかにする実態調査を行った。その際、はじめの指示によって与えた一時的な読みの目的や、文章を読む目的に対するメタ認知的知識によって、理解過程における読みの行動が変化するかどうかも確かめた。読みの行為は、一時的な目的の影響より、文章構造との関わりの方が大きいという結果が得られた。

第3節では、小学校高学年と中学生を対象とした二つの調査を実施し、説明的文章の読みの発達過程を明らかにした。一つは、小学校4年生から6年生および中学校1年生と2年生を対象とした調査を実施し、学年段階が上がるにしたがって、エピソード的な出来事から建物の構造的な説明へと興味の観点が移行すること、漢語的な表現から和語的な表現へと文章表現への評価の観点が変化する傾向にあること、結論の理解の程度が学年段階の進行のみならず意識化の程度と関連のあることが明らかとなった。もう一つは、小学校高学年と中学生（中1・中2）に対する説明的文章の読みの実態調査を通して、課題状況の条件の設定の違いと学年段階の違いが、理解の程度に対してどのように影響するかを見ると、中学校段階では批判的な読みの構えを持つことによって文章の記述により正確な理解を形成することがわかった。しかし、設定していた矛盾のある箇所への批判的な理解は、読みの構えによっても、また学年段階によっても違いはなかった。

第4節では、中学校3年生に対する比較教授実験を通して、理解方略の教授によって橋渡し推論を明示化することが、文章理解を深めるかどうかを検証した。事後テストにおいて有意差が見られたのは、二つの事項を関連づけて考える問題においてであった。本文の該当箇所1カ所を探して答えることができる問題では差が見られず、論理的・修辞的關係を理解方略として学習することは、文章全般の理解を深めるというよりは、その有効性が特定の種類の理解に限られると判断された。

(第5章)

第5章では、第III軸および第5の研究課題に対応し、教師の持つ説明的文章の読みの学力観と授業のあり方との関連について、授業記録の分析、インタビュー調査、米国における読みの教授のあり方との比較という3つの方法を用いて検討した。

第1節では、授業記録の分析を通して、教師の持つ説明的文章の読みの学力観と授業のあり方との関わりをとらえる枠組みを設定した。

第2節では、中学校国語科教師に対するインタビュー調査を通して、授業のあり方と背後にある教師主体が持つ指導理論との関係を明らかにした。文章の論理が段落の要点のつながりとしてとられえる傾向にあること、明示的な情報の字義通りの理解を説明的文章の読みの中核的な学力としてとらえる傾向にあること、推論的読みは授業で育成する中核的な学力としてはとらえられず、発展的な段階のものや話題の一つとして周辺的なものと位置づけられる傾向にあることが明らかとなった。学力の中心化は、どのような国語学力を育てる教師で

ありたいかという国語科教師としてのアイデンティティの形成と関わりがあると考えられた。

第3節では、米国の認知心理学における文章理解方略の研究の動向と、教科書の調査および分析から、米国における読みの学力観、指導観を明らかにした。スキルのように無意識的・固定的なものから、方略のように意識的・流動的なものへと転換しようとする方向、それらを協同的な学習を通して教授しようとする傾向が見出された。また、教科書においても、スキルから方略へという指導観が提示されていて、認知心理学研究の成果の反映が見られた。

(第6章)

第6章では、第IV軸および第6の研究課題に対応し、前章までの研究課題の検討をふまえ、説明的文章の推論的読みを形成するための授業仮説を立て、実際に授業を行うことで、学習者同士の協同的過程を通して推論的読みがどのように形成されるのかについて検討を行った。

第1節では、第3章から第6章までの分析・考察から導かれた第I軸から第III軸までの課題の把握から、説明的文章に表された筆者による論証の理解について、非明示的な暗黙の論拠を補って理解する読みの学力を形成することを実験授業の課題として設定した。これは、学力モデルにおける全ての要素が相互に関わって形成される読みで、学習者がはじめから自立的に行うには困難なものである。したがって、授業において学習者のうちにこうした過程を実現するためには、小グループによる協同的過程を取り入れる必要があると考えた。

第2節では、二つの説明的文章の読みの授業における話し合いにおいて、推論的読みがどのように成立するかを協同的論証という観点から考察した。与えられた課題を自らの問題として取り込む過程、仮の解釈を提示する過程、相互に根拠を挙げたり反証を行ったりすることで妥当性を検証する過程、結論として最適な解釈を選択する過程が、協同的な過程として見られた。

第3節では、二つの説明的文章の授業において、協同的過程を通して推論的読みが実現したことについて、その意味を学力形成という観点から論じた。授業方法とともに推論的読みの形成過程を示したことで、教師の学力観の中に推論的読みが周辺的なものとしてではなく位置づけられ得ること、協同的過程が学習方法としてだけではなく、学力の一側面として定位されるべきこと、推論的読みの総体が継続的、発展的に経験されることで学力が形成されることを論じた。

(結章)

結章では、第1節で、1章から6章までの研究成果を総括し、第2節で、それらをふまえて、説明的文章の読みの学力形成への提言、さらに国語学力の形成への提言を行った。

第2節での説明的文章の読みの学力形成論への提言は、4つの軸と学力モデルによって学力形成過程の把握が行われるべきこと、学力モデルは最終的に教師のものになるべきであることその他、第I軸から第IV軸に沿って、第3章から第6章の成果を一般化した提言を行った。

国語学力形成への提言は、同様に4つの軸と領域ごとの学力モデルによって、「書くこと」「話すこと・聞くこと」の国語学力の形成過程についても把握すべきであること、領域によって、第I軸から第IV軸に差異があり、そうした差異をふまえるべきこと、第IV軸の協同性は、推論的読みと同じように、国語学力の一側面としてとらえるべきことを提言した。